

こころのケアチーム活動報告

はじめに

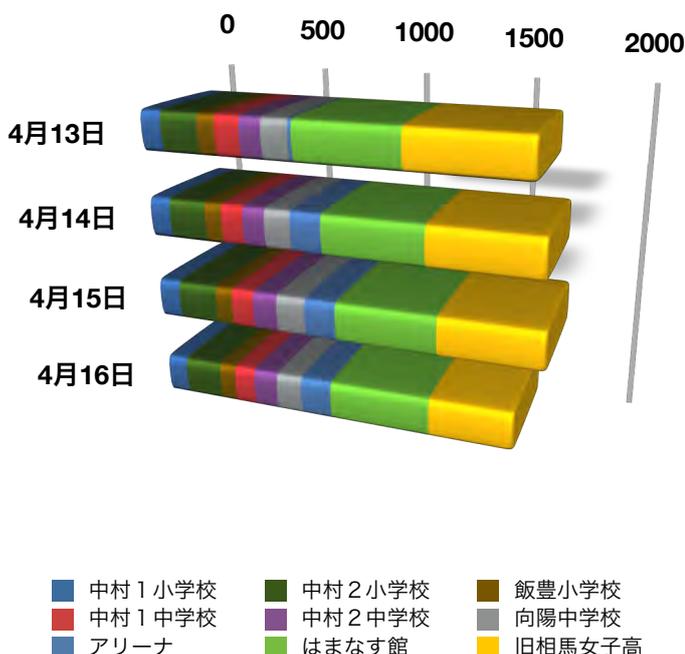
未曾有の被害もたらされた東日本大震災から、ようやく二ヶ月が経った。各種報道から明らかなように、今回の被害は「想定外」と簡単に表現できるものではない。特に福島県では震災に引き続く津波被害だけでなく、原発事故・放射能汚染、さらには農作物等の風評被害があり、三重四重の苦難は他の地域と一線を画しているとも言えよう。既に複数の拠点で各種医療チームが展開をしているが、精神・神経科では東京都の要請を受けて福島県相馬市に派遣され「こころのケアチーム」として活動を行った。活動期間は平成23年4月12日より5月3日までの計三週間。医師一名・看護師一名・事務一名の計三名が一チームとなり、週替わり延べ9名が医療支援に当たった。



相馬市の精神医療

支援内容の前に、相馬市の特殊な背景から述べたい。ここは1880年頃に起きた相馬事件（藩主の精神病発症をきっかけとした御家騒動）（<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%9B%B8%E9%A6%AC%E4%BA%8B%E4%BB%B6>）の影響を遺し、震災以前から精神科病院のみならずクリニック・総合病院での精神科外来が存在しなかった地域である。精神疾患に対する偏見は根強く、患者さんは隣の南相馬市・双葉町までの通院を余儀なくされていた。そのかろうじて医療が受けられる地域を原発の事故が襲い、病院は閉院。相馬市からいわき市までの浜通り地区を頭文字をあわせ相双地区と呼ぶが、この小さな県とほぼ同じ面積に20万人が暮らす地域から、精神科医療が文字通り消滅する事態に陥ったのである。

相馬市避難所開設状況（避難人数）



今回の医療支援の目的

この特殊な歴史背景を持つ地域で、未だかつてない震災直後に精神科医療を展開するというのが今回のミッションである。支援にあたっては、精神科の看板をなるべく出さず、しかしお節介にならない程度に被災者（のみならず各地から集まるボランティアスタッフ）の精神状態を評価し、危ないケースについては保健師・医療チームと情報を共有しながら、SOSが発せられた時には速やかに対処する、という条件を満たす必要がある。

現地状況

幸いなことに、既に当地では福島県立医科大学の精神科医療チームが丹羽真一教授の指揮下で現地の医療支援に当たっており、手探りながらも一定の支援体制が確立されていた。どんな災害支援でも言えることであるが、支援側も疲弊するためにどうしても短期間の業務に限られてしまい、継続した医療による安定感を患者さんに与えることは難しい。現に到着直後から「日替わりの医療」に辟易したとの訴えもみられ、システムの限界とはいえ何らかの配慮が必要であることを痛感した。そんな中で救いだったのが、「一つの指揮系統が継続して指示に当たり」「慶應として少なくとも三週間継続した精神科医療を提供できる」点であった。

具体的な支援内容

我々は被害を逃れた公立相馬総合病院（<http://maps.google.co.jp/maps?hl=ja&ie=UTF8&ll=37.811263,140.921741&spn=0.001159,0.001996&z=19&brcurrent=3.0x60209de3517d7c7f.0xf05f34d0a2fde974.1>）の外来をお借りして特設の精神科外来を行い、

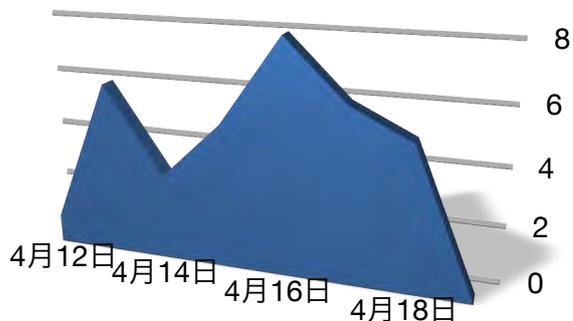


など)を巡って精神疾患が疑われる症例の診察を行い、治療介入や環境整備などを行った。

また被災者が暮らす避難所(中村第一小学校 :

<http://maps.google.co.jp/maps?hl=ja&ie=UTF8&ll=37.795962,140.917811&spn=0.001159,0.001996&z=19&brcurrent=3,0x60209dc4fbd5b6b:0xb81def3057f3f850,1> ;

避難所での対応数



■ こころのケアチーム 避難所における対応人数



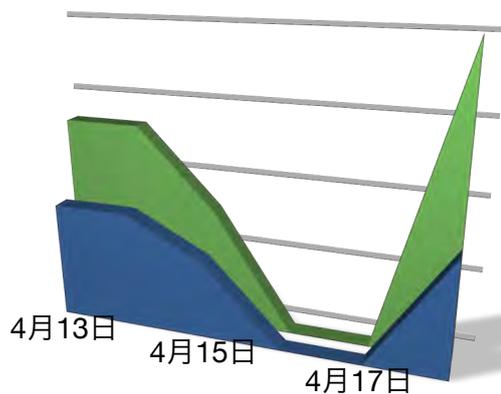
中村第二小学校[http://maps.google.co.jp/maps?](http://maps.google.co.jp/maps?hl=ja&ie=UTF8&ll=37.821285,140.943963&spn=0.001159,0.001996&z=19&brcurrent=3,0x60209e1780fc424d:0x7d199b05d15a46a2,1)

[hl=ja&ie=UTF8&ll=37.821285,140.943963&spn=0.001159,0.001996&z=19&brcurrent=3,0x60209e1780fc424d:0x7d199b05d15a46a2,1](http://maps.google.co.jp/maps?hl=ja&ie=UTF8&ll=37.821285,140.943963&spn=0.001159,0.001996&z=19&brcurrent=3,0x60209e1780fc424d:0x7d199b05d15a46a2,1) ;

中村第二中学校[http://maps.google.co.jp/maps?](http://maps.google.co.jp/maps?hl=ja&ie=UTF8&ll=37.817355,140.945816&spn=0.001159,0.001996&z=19&brcurrent=3,0x60209e14ed810bc5:0xd84fefb9a1dd110e,1)

[hl=ja&ie=UTF8&ll=37.817355,140.945816&spn=0.001159,0.001996&z=19&brcurrent=3,0x60209e14ed810bc5:0xd84fefb9a1dd110e,1](http://maps.google.co.jp/maps?hl=ja&ie=UTF8&ll=37.817355,140.945816&spn=0.001159,0.001996&z=19&brcurrent=3,0x60209e14ed810bc5:0xd84fefb9a1dd110e,1)

外来患者数



■ 慶應担当患者数 ■ 外来受診者合計





原釜地区の津波被害地域

今後の展望

今回の医療支援を通じて最も必要と考えられたもの、そして最も欠けていると感じられたものは、精神科医療の特殊性を鑑みた場合の「治療継続性の担保」に尽きよう。相双地区の特殊性を考えると震災をきっかけに劇的な医療の充実が図れるとも思えず、一つの医科大学とそこに賛同するボランティアだけではどうにも出来ない現実があった。こうしたレポートが地域の医療を考えるきっかけになれば、と強く願う次第である。

文責

三村將、加藤隆、内田裕之

記事作成日：2011年7月1日

最終更新日：2011年7月1日



磯部地区

遙か遠くに見える松が海外線である。海外線まで全て流されてしまい、何も無い。